

第 4 回中原区区民会議課題調査部会会議録

- 1 開催日時 平成 25 年 6 月 5 日（水） 午後 2 時 00 分～午後 4 時 00 分
- 2 開催場所 中原区役所 5 階 502 会議室
- 3 出席者
委員 板倉部会長、成田副部会長、青木委員、稲富委員、梅原委員、反町委員、富岡委員、中森委員

事務局 小野副区長
企画課 今井課長、江口担当係長、倉見担当係長、深谷職員、野並職員、大崎職員
こども支援室 諏佐室長、高岡担当課長、服部担当課長
社会空間研究所 中島さん、栗林さん

- 4 議 題
 - (1) 会議録確認委員の選任（公開）
 - (2) 審議テーマ「子育て家庭と地域をつなぐ人と場づくり」に関する調査検討について（公開）
- 5 傍聴者 2 名
- 6 会議内容
 - (1) 会議録確認委員の選任
稲富委員を選任した。
 - (2) 審議テーマ「子育て家庭と地域をつなぐ人と場づくり」に関する調査検討について
事務局 資料説明

板倉部会長 前回の議論を踏まえて資料が作成されているが、何か補足等があるか。

梅原委員 前回の部会で、リーダーとか、親の教育が大切だと強調させてもらった。親の教育をしっかり行うことで、子どもにもいい影響があると思う。親の教育をどのように行うか、大きいテーマではないかと思う。子育て支援ネットワークで子どもの虐待の話が出ていたが、親が一番多い。

事務局 その他として、後ほど加えさせていただく。まず最初の項目、ママカフェ、こども文化センターの活用について。ご意見は。

稲富委員 ママカフェを開催するうえで必要となる条件や制限はあるか。

事務局 まず開催する場所が必要であること。子どもを見守るボランティアが必要であること。そして、カフェで飲食物を提供するため衛生上の届出をしている事業者が必要である。

稲富委員 場所に関して、何か制限はあるか。

事務局 特にはないが、あまり狭いと子どもが動けない。

稲富委員 富士通ではクロスカルチャーセンターという場所があり、30 畳ほどの広さがある。地域に開放されている。食堂もあるので、カフェも提供できると思うが、地下なので目立たない。

成田副部会長 畳やカーペットなど子どもを寝かせられる場所があればありがたい。情報として

そこでやっている、ということを出せば、場所そのものが目立たなくても大丈夫。
反町委員 カフェの提供事業者は飲食店でなくても構わないのか。飲食可能な会議室等で適した場所なら事業者でなくてもよいのではないか。

事務局 ママカフェで提供している「しいの実」は、保健所の取り扱いとしてはお祭りとしてその都度申請している。衛生上、調理をすることはできない。

富岡委員 ママカフェの拡大として例に挙げられている2箇所は、開催可能なのか。

事務局 前回の課題調査部会の後、実際に当たった。その結果、ルールを守れば可能という返事をいただいている。

富岡委員 ボランティアを探すのが大変だろう。

事務局 なかはらっぱ、市民活動センター等で見つける仕組みを作れないか、ということで提案している。

事務局 こども文化センターに関してはどうか。乳幼児を連れている人も見かけるが、歩いて行ける範囲ということで、中学校区に1つの施設なので、適しているのでは。

中森委員 自転車で来ている人もいる。施設の外で母親たちが集まっている様子も見られる。

事務局 地域子育て支援センターは区に7箇所ある。保育園併設型が3箇所、子ども文化センターの乳幼児室で行っている児童館型が4箇所である。

板倉部会長 飲食業としての衛生上のお話があったが、こども文化センターでの飲食は大丈夫か。

事務局 原則はだめだが、熱中症予防としての水分摂取は可能なので、居場所としては活用できる。

青木委員 衛生上の観点は大切である。丸子地区では、赤ちゃん用のカーペットは普段はたたんでいて、出さないようにしている。使用時のみ出す。さらに、タオルを持ってくるようお願いしている。乳幼児なので、感染しないように衛生面を気にしている。

中森委員 健診について、3ヶ月に特化しているが、里帰りしていて3ヶ月を過ぎてから転入してくる人もいると思う。保健所に来るお母さんすべて対象にできるようにしてはどうか。

事務局 区役所で行っている乳幼児健診は、3ヶ月の後は1歳6ヶ月と3歳になり、ある程度の月齢になっている。転入者向けには冊子を用意しており、転入時に担当課から紹介されて説明する手順ができています。

反町委員 子育てカフェについては、以前行ったような規模で継続して開催していくことは難しい。どの程度集まるか、まったくイメージがつかない中でのイベントだった。今後は、開催費用やエネルギーをなるべく小さくして、回数を増やしていけないかと考えている。基本は同じ形のイメージだが、具体的な形を思案している。

青木委員 震災後、子育てサロンの回数は減ったが、平成24年度は各所サロンの回数が多かった。虐待件数の発表によると、サロンの回数と反比例して虐待件数が減っている。サロンが虐待防止に役立っていることがわかる。こんにちは赤ちゃん訪問を増やすなどすれば、さらに虐待は減るのではないか。

成田副部会長 ホームページについては、写真など視覚に訴えるものが必要。里帰りしていて、

健診直前に中原区に転入する人は、中原区の子育て情報がほとんどなく、3ヶ月健診のタイミングで区役所と初めて接するという人は多いと思う。子育て施策につなげていくためには、視覚から入るのが効果的。

梅原委員 ホームページの担当者の人数はどのくらいか。取組が多すぎると大変だろう。

事務局 内容に応じて各部署で対応している。子育てのホームページに載っている取組の多くは、地域の人にやってもらっているもので、それらを紹介させてもらっている。

成田副部長 広報については、主なところには掲示している。追加するとしたら、ドラッグストアや子供衣料品店などか。

事務局 ある事業者に当たった際に、店舗責任者は権限を持っておらず、判断できないため、本社対応を求められたことがある。

板倉部会長 チラシだと、ただ置いただけだと読んでもらえない、という課題がある。

成田副部長 やはり、口コミで広がっていく、というケースが多い。

事務局 サロン参加者に口コミで広報をお願いしたいと考えている。

成田副部長 ボランティアに孫ができて、友達や孫同士の交流の中で広がったケースもある。

富岡委員 子育てサロンはどこも盛況で、これ以上広報しても入りきらない状況がある。町会の掲示を見たり、健診で紹介されたりしてサロンに来る人が多くなってよいのだが、利用者が増えるとなれば場所を増やすしかない。サロンの時期が終わったお母さんたちが知り合った友達同士で自主的にサロンを始めている。こ文や社協の会議室などで自主サロンをやっているし、場所を探してやっているグループもある。行政が主催すると、さっき出たように飲食の届出などの問題があるが、自主サロンだとみんなで集まってお茶をするというものなので、気楽にできるメリットがある。

事務局 自主的なサロンを増やしていく仕組み作りが必要か。

青木委員 地区ごとにサロンを開催しているが、お母さんたちは、違う地区にも足を運んでいる。毎日でも外に出たがっているので、各地区で曜日をずらしたり数を増やしたりして、開催していない日を減らすとよい。

稲富委員 サロンは社交的なイメージがあると思う。社交的な場に行くことが苦手な人もいるのでは。内気な人でも行きやすいところ、悩んでいる人が行くところ、ということに分らせる必要がある。悩んでいるあなた向けですよ、という広報の仕方。

中森委員 保健所では、毎日何かしらやっているのか。

事務局 日によって、健診であったり相談であったり教室であったり、内容が違う。健診や育児相談で集まりがあることを周知している。悩みの強い人向けの取組はあるが、全員が来ているわけではない。悩んでいる人が行けるところを用意することが必要。グループ交流なども行って、健診で個別に誘っている。

富岡委員 今までの話は、元気のある人向けかな、という気がする。図書館での読み聞かせをやるにしても、悩んでいる人は来ないのでは。相談室や個室の場を欲している。

事務局 区役所には相談室を用意している。家にこもっている人を引っ張り出すのが難しい。

成田副部長 悩みを持っている人は、サロンに来ると、他のお子さんと比べてしまって、余計に落ち込んでしまうこともある。出てきてもらうよりも、誰かが訪ねていく方が有効なケースもある。

事務局 悩みを持っている人を把握するのは難しい。

富岡委員 民生委員の役割だが、個人情報への壁があり、なかなか把握できない。

中森委員 大きいマンションなど町内会に入っていない人もいる。交番が1件1件訪ねて回っているの、情報を持っているのでは。

事務局 保育園の園庭開放では相談場を作っている。きっかけづくりとして用意しており、いつでも受ける体制をとっている。相談件数は少ないが、深刻なケースがあると感じている。家だと2人きりなので、毎日来る人もいる。最初は来るだけだが、継続的に関わると、だんだん悩みを聞かせてくれるようになる。1回限りではなく、長期的に関われる取組も大事だと考えている。子育てサロン、子育て支援センター、保育園、それぞれ役割があると思う。

青木委員 どういうところが行きやすいか。専門の相談員がいれば行きやすい。

事務局 高齢者対策と共通する課題でもあるが、地域ごとに活用できる資源、状況が違う。

富岡委員 民生委員と包括支援センター、高齢・障害課のネットワークがある。いかに気づきができるか、がテーマである。民生委員と包括の会合を年5、6回行って情報交換している。ケースの情報を共有でき、対応を重点化できる。ネットワークができている。

青木委員 先ほど出た親の教育の課題として、中学生の虐待ケースが増えている。考える必要がある。

成田副部長 ボランティアの参加の課題として、活動が平日の午前中に集中してしまい、分散化してしまう点がある。さらに、子育てサロンの回数を増やすという中で、土曜日など週末に行うことで、男性の視点を入れられるようにすることが必要だと思う。ゆくゆくは青少年の育成に関わってもらうために、子どものころから男性に入ってもらった方が人材育成上もよいのでは。

中森委員 大学生も、インターンシップとして活用する場があってもよい。

事務局 オズ通りで、慶応大学の学生と子どもたちが触れ合う活動があった。そういう活動を促す仕組みづくりが考えられる。

中森委員 とどろきアリーナなどを、親子で触れ合って交流する場として活用したい。フロンターレの取り組みもある。

中森委員 日本語講座は、国際交流センターだけでなく、市民館でもある。そこでもアピールできるのでは。外国人向けチラシは、出生の時はあるのか。

事務局 母子健康手帳は何か国語かはあるが、出生時のものとしては特に用意していない。

中森委員 たくさんの情報がありすぎて、選べない。重要な点だけを書いたり、イラストでわかりやすくするなどしたほうがよい。日本語があまり上手でないお母さんのために子どもが訳したり、学校を休んで区役所に一緒に行くなどのケースもある。

国際交流センターに登録サービスがあるが、有料である。医療については、MICかわさきという病院への付き添いのボランティアがあり、川崎市内でも4カ所くらいの病院が提携している。

梅原委員 外国人が生活するのに必要なことを、断片的ではなく網羅的に知らせるようできるとよい。

面倒を見る人は誰でもいいわけではない。ある程度資格があったり、必要な訓練を受けることが必要だと思う。

稲富委員 父子手帳を作ったらどうか。父親がやるべきことを伝える。子どもができたことが分かった時と、子どもが生まれて抱っこした時が効果的なタイミングである。

事務局 父親向けとしては、両親学級がある。父子手帳は他の自治体で取り組んでいるところがあるので、参考にしたい。

稲富委員 どうしたらいいかわからない、難しい状態の人向けに、経験したことをセミナーで発表する形もいいかもしれない。こんな悩みがあって、こんな経験をした、など。セミナーの会場でカフェをやり、相談も受け、父親向けの催しも行うなど、いっぺんにできれば一番いい。

事務局 今回の議論のまとめとしては、居場所づくりでは、ママカフェの回数を増やすこと、場所と支える人を見つける仕組みづくり、こども文化センターは衛生面の対応、地域子育て支援センターの活用など。こもりがちな親子対応としては、健診と合わせたカフェは持続可能な規模で。情報提供では、ホームページは写真やイラストなどでわかりやすく視覚に訴えること、これは外国人対応としても当てはまる。広報として、ドラッグストアなどよく行く場所にも。また、ロコミでお孫さん世代にも。相談しやすい環境づくりは、サロンのない日をなくすこと、場所を増やすこと。個々の悩みに近い広報、困っている人を探すネットワークの活用。マッチングは平日だけでなく男性参加を促す、大学生のインターンなど。資格や教育も必要。外国人対策は、交際交流センターだけでなく市民館でもできることがある。出生届を受けた時に提供する情報をわかりやすく。付添ボランティアのPRなど。親の教育は親子参加のふれあい行事、プレパパや両親学級への参加。すぐに取り組みそうなものは。

青木委員 小学校で子育てサロンを開催している。小学校の授業として、6年生を対象にしている。

成田副部長 父親像についての意見と、父子手帳の提案が印象に残った。どうしても母親に目が行きがちだが、両親でどう子どもを育てるか、という視点が必要だと感じた。

板倉部会長 本日のまとめは以上のとおりとする。

以上